

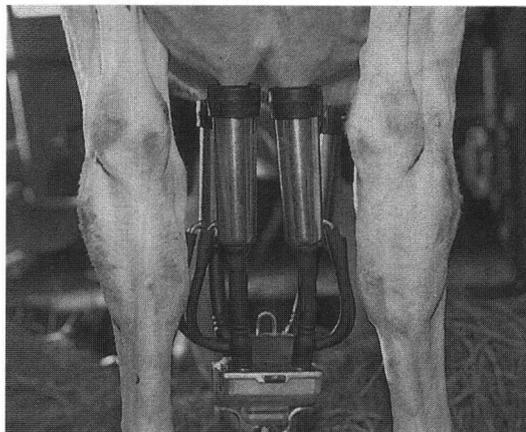
# 黄色ブドウ球菌を知ってやっつけよう

乳房炎はその原因菌によって、症状、治療方法、予防対策などが異なります。中でも黄色ブドウ球菌による乳房炎は、伝染性の乳房炎であって、一度感染するとなかなか治らないという特徴を持ちます。このやっかいな黄色ブドウ球菌について、その特徴と対策を紹介します。

## 1. 黄色ブドウ球菌の特徴

ブドウ球菌は常在菌と言われ、子宮・膣、内部生殖器、皮膚など牛の周りに広く分布しています。乳房炎の他にも子宮内膜炎や膀胱炎などの炎症をおこす菌としても知られています。ブドウ球菌の中でも黄色ブドウ球菌は、溶血性（赤血球を壊す性質）と強い毒性を持つことが大きな特徴です。

黄色ブドウ球菌の感染源は乳汁、乳腺、乳頭、さらには乳頭の傷やただれなどで、搾乳器具や搾乳者によって伝染することも特徴です。



## 2. 黄色ブドウ球菌による乳房炎の特徴

黄色ブドウ球菌が原因になる乳房炎には次のような特徴があります。

- 潜在性乳房炎、臨床型乳房炎のどちらにもなる
- 臨床型乳房炎の場合はエソ性の乳房炎となり、その強い毒性によって牛が死亡する場合もある
- 乳腺内に病巣を作り、しこりとなることが多く乳房内に小さな膿瘍を形成することがある
- 乳腺奥深く入り込むため抗生物質が届きにくく、治癒しにくいので慢性化する
- 搾乳中にミルクカーや搾乳者の手などから伝染するので、蔓延し経済的損失が大きくなる。

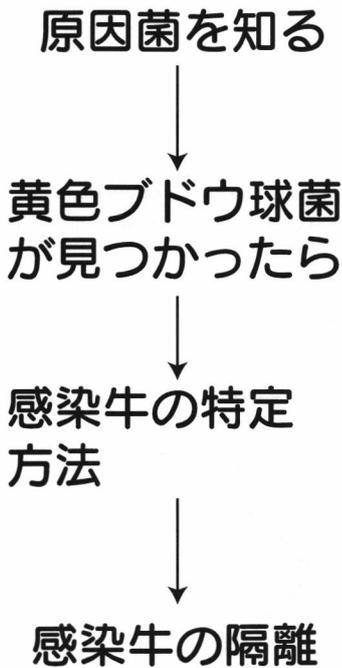
## 3. 牛群内にこんなことがあったら要注意です

～黄色ブドウ球菌牛群の特徴～

黄色ブドウ球菌に感染している牛群には次のような特徴があります。心当たりがあれば要注意です。

- ◎牛群の中に数頭慢性型の乳房炎で直らない牛がいる  
(感染した乳区は一定の間隔で発症し、その間隔は2週間から1ヶ月ぐらいの場合が多い)
- ◎バルクの体細胞が年間30万/ml以上と高い
- ◎感染した分房の乳腺組織にしこりやくぼみ状の部分がある
- ◎外部から搾乳牛を購入したあとに慢性的な乳房炎が増えた

## 4. 黄色ブドウ球菌をやっつけよう



乳房炎が発生した場合は、その原因菌が何であるかを知ることが重要です。NOSAIなどの獣医師に相談し細菌培養検査を行います。細菌培養検査で黄色ブドウ球菌が見つかった時は、早急に対策が必要です。

黄色ブドウ球菌が原因で乳房炎が発症していれば、搾乳作業を通して乳房炎が蔓延する危険があります。乳房炎が発症していなくても他の牛が感染している危険があるので、感染牛を特定します。

黄色ブドウ球菌に感染している牛を特定するには、牛群内の搾乳牛すべての分房を検査する事が確実な方法です。これには費用と時間がかかるので、少なくとも牛群内で体細胞が高い牛はできるだけ検査します。

感染している牛と体細胞の高い牛は隔離して管理します。特に搾乳作業は次の方法で徹底して隔離するようにします。

- ①感染牛を隔離して、特定の場所に置く
- ②感染牛を搾乳するユニットは非感染牛と別にする
- ③非感染牛を先に搾乳してから、感染牛を搾乳する

### 搾乳作業の確認とミルカーの点検

黄色ブドウ球菌は伝染性の乳房炎なので不適切な搾乳作業やミルカーの不備によって牛群内に蔓延してしまいます。搾乳作業は特に基本を守り慎重に行います。ミルカーにも不備がないかメーカーなどに依頼し点検してもらいます。

### 搾乳牛・初妊牛導入

搾乳牛の導入はこの期間は控えます。黄色ブドウ球菌の対策を進めているときに、外部からその他の原因菌を持ち込むことはしないようにします。また、初妊牛も既に黄色ブドウ球菌などに感染している場合もあるので、分娩後細菌の培養検査を行い、黄色ブドウ球菌に感染していないことが分かってから搾乳牛と同じ管理をします。これは、自家育成の初産牛も同じです。

### 感染牛の淘汰

黄色ブドウ球菌による乳房炎の抗生物質による治癒率は10～30%という報告もあります。治療しても再発を繰り返す牛や体細胞が高く継続する場合は淘汰する事も検討します。